

海幸山幸

天の神ニギノミコトは、天から地上に下りて来て、コノハナサクヤヒメと結婚しました。ふたりのあいだに、三人の男の子が生まれました。上の子を海幸彦、末の子を山幸彦といいました。

海幸彦は、いつも海へ漁に出て魚を取り、山幸彦は、いつも山へ狩りに出て、けものを取っていました。

ある日、弟の山幸彦が、海幸彦にいました。

「ねえ、一度おたがいの道具を取りかえないかい。わたしも、魚を釣ってみたい」

海幸彦は、

「いやだね。わたしは、けものを弓で射たりしたくないよ」と断りました。けれども、いくら断つても、山幸彦はあきらめません。海幸彦はしかたなく、

「では、一度だけだよ」といつて、ふたりは道具を取りかえました。

山幸彦は、さっそく海辺に行つて、釣り糸の先に釣り針を付けて水に投げ入れました。けれども、魚はまったく釣れません。しばらくして、ようやく魚がかかったらしく、糸が強く引かれましたが、針だけ取られて、魚は逃してしまいました。

山幸彦が帰つて来ると、海幸彦は、

「さあ、もういいだろう。おまえの弓矢を返すから、わたしの釣り針を返してくれ」といいました。山幸彦は、

「さかなは一匹も釣れないで、しかも釣り針も無くしてしまったんだ」といいました。海幸彦は、腹を立てて、どんなことをしても釣り針を返せと、山幸彦にせまりました。そこで、山幸彦は、剣（つるぎ）を溶かして釣り針を五百作つて、わたしました。けれども、海幸彦は受けとりませんでした。釣り針を千作つても、承知しませんでした。

「もとの釣り針を返してくれ。あれでなくてはだめだ」

山幸彦は、泣きながら海辺に行きました。すると、海の流れをつかさどるシオツチノカミがあらわれて、

「どうして泣いているのですか」とたずねました。

「わたしは兄さんにたのんで、わたしの弓矢を見さんの釣り針と取りかえてもらいました。ところが、わたしは、その釣り針をなくしてしまったのです。ほかの釣り針をたくさん作つて返そうとしましたが、兄さんは、もとの釣り針でなければだめだということです。それで、どうしようもなくて泣いているのです」

山幸彦がいうと、シオツチノカミは、

「では、あなたのために、うまい工夫をしてあげましょう」といいました。そして、竹を編んで小さな船を造つて、山幸彦を乗せていいました。

「この船を海に向かつて押し流してあげますから、じつとすわっててください。船はすぐに大きな流れに乗るでしょう。そのまま流れて行けば、たくさんのお殿が連なる海の神の宮に着きます。入口の門のかたわらに泉があつて、そばにかつらの木が立っています。そのかつらの木に登つて待つておいでなさい。海の神の娘が、あなたを助けてくれるでしょう」

山幸彦は、教えられたとおり、船の中にすわつて、潮の流れのままに流されて行きました。すると、海の神の宮に着きました。泉のほとりのかつらの木に登つて待つてっていると、召し使いの娘が、水をくみにやつて来ました。娘が水をくもうとすると、泉に光がさしていました。ふり仰い

で見ると、木の上に美しい若者がいました。若者は、

「わたしに水をいただけませんか」といいました。娘は水をうつわにくんでわたししました。山幸彦は、首飾りの玉をひとつ外して口にふくみ、水を飲むふりをして、うつわに玉をはきだしました。娘は、玉を取り出そうとしましたが、うつわにくっ付いて取れません。そこで、娘は、うつわごと海の神の娘トヨタマヒメの所に持つてもどりました。

トヨタマヒメは、

「門の外に、だれかいるではありませんか」とききました。娘は、

「はい。泉の側のかつらの木の上に、美しい男のかたがいらつしやいました。わが海の神さまよりもうといおかたでした。水がほしいとおっしゃったのでさしあげましたら、水は飲まずに、首飾りの玉をひとつはきだされました。取ろうとしてもうつわにくっ付いてはなれないので、ここに持つてまいりました」といいました。

トヨタマヒメは、ふしぎに思つて、泉に行つてみました。すると、美しい若者が立っていたので、父の海の神の所に行つて、

「門の所に、美しい男のかたがいます」といいました。

海の神が、門の所に行つてみると、そこにいたのは天の神の息子、山幸彦でした。海の神はおどろき、山幸彦を御殿の中に連れて入りました。そして、毛皮や絹の敷物を重ねて、その上に、山幸彦をすわらせ、たくさんのおぜんをならべて、ごちそうしました。

山幸彦とトヨタマヒメは結婚しました。

三年たつたとき、山幸彦は、兄さんの釣り針をさがしていたことを思い出しました。ため息をついていると、トヨタマヒメがそれを見て、海の神に話しました。海の神は、山幸彦に、

「この三年のあいだ、あなたが嘆くことはなかったが、きょう、深いため息をついたと、娘から聞きました。どうしたのですか。あなたがこへ来たわけと関りがあるのですか」とたずねました。山幸彦は、兄に借りた釣り針を無くしたことを話しました。

海の神は、海にすむすべての魚を呼び集めて、

「だれか、海幸彦の釣り針を持つている者はいないか」とたずねました。すると、魚たちは、
「そういえば、たいのやつが、のどに何かがささつて何も食べられないと、苦しんでおります。きつと、それでしよう」といいました。そこで、たいを連れて来て、のどを見ると、釣り針がささっていました。すぐに外して、洗い清めて、山幸彦にわたしました。海の神はいいました。

「この釣り針をお兄さまにわたすとき、後ろ手にわたして、こう呪うのです。『この釣り針は、心のふさがる針、心のたけりくるう針、貧乏な針、愚かな針』と。それから、お兄さまが高い所に田を作つたら、あなたは低いところに田を作りなさい。お兄さまが低いところに田を作つたら、あなたは高い所に作りなさい。わたしは、あなたの田に水が行きわたるようにしましょう。また水で押し流されないようにしましょう。三年のうちに、お兄さまはきつと貧しくなるでしょう。もしお兄さまが、あなたを恨んで戦いをいどんで来たら、この潮満玉（しおみつたま）でおぼれさせ、助けてくれといつたら、この潮乾玉（しおふるたま）で助けてやりなさい」

海の神は、山幸彦に潮満玉と潮乾玉をわたしました。それから、さめたちを呼び集めて、

「今、山幸彦さまが、上の国にお帰りになる。おまえたちのうち、だれが最も速く送つて行けるかな」とたずねました。すると、さめたちは身の丈にあわせて口ぐちに答えましたが、一尋（ひとひろ…約一・五メートル）もある大きなさめが、

「わたしは、一日で行つて帰つて来られます」といいました。海の神は、

「では、おまえがお送りせよ。海の中を行くとき、けっして恐がらせないように」といって、そのさめの背に山幸彦を乗せて、送り出しました。さめは約束どおりに、一日で送ってもどりました。

山幸彦は、国にもどると、海の神に教えられたとおり、釣り針を海幸彦に後ろ手に返しました。そして、

「この釣り針は、心のふさがる針、心のたけりくるう針、貧乏な針、愚かな針」となえました。

海幸彦は、だんだん貧しくなっていく、田を作っても水が干上がったり、また水に流されたりしました。海幸彦は、心がふさがり、たけりくるって山幸彦に戦いをいどみました。けれども、山幸彦は、潮満玉でおぼれさせたり、潮乾玉で助けたりして、海幸彦を苦しめました。とうとう、海幸彦は、うなだれて、

「わたしは、これからは、あなたの守り人となって、昼も夜も仕えましょう」といいました。

しばらくして、海の神の娘トヨタマヒメが、山幸彦のもとにやって来ました。そして、

「わたしは、もうすぐ、あなたの子どもを産みます。でも、天の神の子は、海の中で住むことはできないので、こうしてやって来ました」といいました。

海辺に産屋が立てられました。トヨタマヒメは、産屋に入るとき、山幸彦にいました。

「よその世界の人は、子どもを産むとき、もとの世界でのすがたになって産むものです。わたしも、もとのすがたになって産みますけれど、そのすがたをけっして見ないでくださいね」

山幸彦は、けっして見ないと約束しましたが、どうしても見たくなって、産屋のすきまからのぞいてしまいました。すると、トヨタマヒメは、八尋のさめになって、うねうねとうねっていました。山幸彦は、おどろき、おそれて、逃げました。

トヨタマヒメは、山幸彦に見られたことを知っていました。

「子どもが生まれたら、わたしは海に帰るけれど、海坂（うなさか）を越えてここまで通って来ようと思っていました。けれども、ほんとうのすがたを見られたからには、来ることはいたしません」

トヨタマヒメは、生まれた子を置いたまま、海坂をとじて、海の神の宮へ帰って行きました。

海坂…海の世界とこちらの世界との境界。

原話…『古事記 祝詞』岩波古典文学大系

再話…村上郁